岡山県俳人協会会報

烏城

第87号
令和6年12月発行
（2024年）

発行
岡山県俳人協会

事務局
〒700－0964
岡山市北区中仙道
58－111－103　左居方
TEL　090－7596－8093
振替口座01380－0－102923
（年会費専用）

岡山県俳人協会　第四十五回俳句大会
令和六年大会記

10月になっても続いていた残暑が落着き、秋らしい涼しさとなった10月20日（日）、岡山国際交流センターに於て、岡山県俳人協会第45回俳句大会が開催された。

会場は大勢の出席者でたちまち満席となり、二階席へも案内が必要となった。

壇上には朱色の鶏頭、杜鵑草、藤袴などの花が美しく活けられ、会場を秋らしく彩った。

今回は応募句1014句、当日出席者149名で、大変盛会となり、当日句は134句であった。

午後一時、石見邦慧常任幹事の司会で開会。最初に柴田奈美会長の挨拶があり、多数の参加を謝し、講師への謝意を述べられた後、当日配付資料の「会報誌『烏城』から読み解く岡山県俳人協会の沿革（創刊号～41号）」に触れ、昔の詳しい事情を知っている方があれば、知らせて頂きたいと締め括られた。

続いて講演の部となった。

講師の岸本尚毅先生は、岡山県出身で、公益社団法人俳人協会評議員・「天為」「秀」同人・山陽新聞の選者である。

「虚子を読む」と題し、用意された資料をもとに虚子の散文について熱く語られた。資料は一行毎に番号が付けられている独特のものであり、番号を示すことにより、効率よく分かり易く講演を進められた。俳句ではなく散文についてのお話はとても新鮮で、会場全員が熱心に聞き入った。

講演後、応募句の中から先生が選ばれた25句について、丁寧なご選評を頂いた。特選2句には岸本先生より色紙が授与された。

休憩後、応募句の表彰。上位5賞と秀逸賞、優秀賞、新人奨励賞に柴田会長から賞状と賞品が授与された。大学生、高校生の新人奨励賞4作品には、山本那実氏揮毫による書が贈られ、会場はあたたかい拍手に包まれた。

次いで当日句の表彰。当日句は12名の選者に加え、岸本先生にも選をお願いした。

選者12名の特選句の選評のあと、選者特選賞がそれぞれの受賞者に贈られた。

岸本先生の特選句には、先生より色紙が授与された。

高点句より、大会大賞、烏城賞、支部長賞が授与され、会場は大きな拍手に沸いた。

会は滞りなく進行し、小倉貴久江副会長の挨拶で無事終了した。

（原田　慶子）

大会風景

受付準備

応募句入賞作品

おかやま県民文化祭賞
校門といふ春風の湧くところ　西村　泉

岡山県知事賞
朧夜を濡れてもどりし回覧板　小西　瞬夏

おかやまアーツフェスティバル実行委員長賞
わたくしを抱いた母抱く螢の夜　久戸瀬孝子

岡山市長賞
螢の命こはさぬやう放つ　山本　那実

山陽新聞社賞
湯たんぽの朝の温みに似て余生　山県　章宏

秀逸賞

水飲みて水にも噎せて広島忌　原田　慶子
気まぐれの風が船頭花筏　佐藤　史男
元気とは腹の減ること草むしり　国方　一航
寒ゆるむうすくれなゐの志野茶碗　松尾　佳子
分校に山羊の当番島の夏　山本　一穂
百薬に勝るおしやべり小鳥来る　安藤　加代
葉桜や初版に出合ふ古書の市　石村美智子
レコード針の着地しづやか夜半の秋　古川　緑波
露けしや手書きの「烏城」創刊号　難波　政子
鼠木戸入れば江戸めく夏灯　曽根　薫風
水攻めの地にたうたうと田水張る　小林　克己
天高しインディゴ色の風の町　岡本三恵子
しあはせの形にねむる小猫かな　磨家　泉
やはらかな波が波追ふ植田かな　島村　博子
園児らの風呂敷ほどの花筵　高木　幸子
夕蛍離農の納屋の飼葉切　延堂　裕子

優秀賞

秋天や走りたさうな眼の駝鳥　南　のぼる
夜半の雨閏二月のをはる音　可児　義朗
地球病んでゐる向日葵の林立　菱川　瑞枝
体ごと投ぐる幼の歌留多取　小橋さち江
青鷺の沼驚かせ翔ちにけり　脇本　妙
ひと駅を送られてゐる緑の夜　広畑美千代
売家札まだ立つ生家秋ざくら　竹井　愛子
玄室の巨石を伝ふ花菜雨　角南　英二
水飲んでこの世に戻る昼寝覚　大塚　功子
もしかして地球の苦味蕗の薹　宮脇　洋子
春浅し空家に残る猫の皿　新坂さくら
矢を放つ少女の眼風光る　三垣　博
人ごゑを攫つてゆきぬ滝百丈　小倉貴久江
人の世の地図なき旅や冬銀河　久田　康世

新人奨励賞

また来いよ祖父の作業着蚊遣りの香　児子　爽香
風光る白球を追う君を追う　江村　遥
朝焼やあす廃校の子ら五人　小坂田　華
朝風や口にはじけるミニトマト　高祖　桃香

新人奨励賞

岸本尚毅先生特選
曼荼羅の宝幢如来トマト吸ふ　北川　桔梗

百歳の天に首出せ雲の峰　佐藤　寿彦

当日句入賞作品

大会大賞
一村を救ひし碑文草の花　左居　正惠

烏城賞
蕾まだ祈りのかたち曼珠沙華　大津千代子

支部長賞
引力に音あり木の実またひとつ　小倉貴久江

入選句
新米の一粒づつの光喰む　角南　知子
達筆のやうに下手な字月涼し　雪　花　菜
あさがほの種封に祖母の筆　山県　章宏
学校のチャイムが風に稲の花　安藤　加代
半身を松に沈めて松手入　原田　慶子
逆縁の葬のしのび手秋ゆけり　小川　三胡
釜殿に上がる紫煙や鵙の晴　角南　英二
果実酒の色のとろりと秋深し　磨家　泉
辛抱の鷺の構へや秋しぐれ　藤原　照子
あの山が御巣鷹山です鳥渡る　難波　政子
ビルの影ビルに凭れて秋高し　脇本　妙

岸本尚毅先生特選句
曼珠沙華人間出たり入ったり　大倉　白帆
スコップで波をさらふ児浜の秋　松若英理子
老妻の括れままあり青瓢　石村美智子

選者特選
柴田　奈美特選
菊を得て光は白を極めたり　谷本　俊夫
小倉貴久江特選
達筆のやうに下手な字月涼し　雪　花　菜
赤木ふみを特選
菰を巻く法被の鎌の煌めけり　竹内　建雄
大倉　白帆特選
達筆のやうに下手な字月涼し　雪　花　菜
密田真理子特選
果実酒の色のとろりと秋深し　磨家　泉
小川　三胡特選
秋冷の臍をいとはむ養生訓　森脇　八重
佐藤　史男特選
引力に音あり木の実またひとつ　小倉貴久江
山本　那実特選
神なんていないと思ふ能登の秋　橋本　康子
山本　一穂特選
逆縁の葬のしのび手秋ゆけり　小川　三胡
田中　立花特選
蜻蛉の群れ草の丈風の丈　松尾　佳子
森脇　八重特選
耳鳴や風のすき間に秋の声　国定千代子
小坂田　華特選
一村を救ひし碑文草の花　左居　正惠

柴田会長と岸本氏

岸本尚毅先生講演「虚子を読む」

岸本尚樹氏講演

虚子の文学の基本は「写生」である。俳句は花鳥諷詠。散文まで含めると「写生」。

写生文とは

読物である点は小説と同様。小説はフィクションを貴ぶ。写生文はそれを斥ける。しかも面白い読物であることを目的。こういう主張の下に写生文を作りはじめて五十年。写生文であって小説であることも有り得る。写生文は事実をいつわらぬと同時に作者の感情を貴ぶ。「現代写生文集」に思ふ（ホ昭三十一・一）

事実の選択について

事実の選択はする、抹殺はする。（略）事実の把握、省略、精疎、濃淡等に依って隠そうとしても隠す事の出来ぬ作者が存在（略）写生文

を書く者は自然の中から或る事実を採る。自分で創るのではない。採択という事も一種の創造と言えましょうが心の持ちようが違う。（ホ昭二十七・四）

虚子幼時の「三大エピソード」と演者が命名。

「女遍路」は、幼児だった虚子が女遍路に抱かれて連れ去られそうになった話。

「高浜の彦さん」は、虚子が高浜姓となる原因となった高浜彦蔵のこと。

「前原のふうさん」は虚子の幼馴染の女の子。

次の作品内容を概説した。

「西の下」（青柿堂版『虚子自伝』）

朝日新聞社版『虚子自伝』より。

房（ふう）さん（朝日新聞社版『虚子自伝』）

（虚子が八十歳頃）。

「泣き味噌」（虚子が四十歳手前の頃）

「ホトトギス」大正元年十月号所収。

「おない同士」（前原家の人々のこと）

「ホトトギス」昭和六年九月号所収。

「西ノ下の甘藷」

「又風早 西ノ下のこと」

（虚子が六十四、五歳の頃）

「ホトトギス」昭和十四年二・三月所収。

「自伝」は写生文

「自伝というものは、自分の過去のことを、大小となく記述するものである。自分の過去のことと言っても、その叙述の筆が、自分で自分を書くものであるから、自讃に傾いてもいかず、自嘲に過ぎてもいかず（略）「朝日新聞」から出版局の人が見えて、私に自伝を書けと言う。しかも小説のようなものでもいいと云う。まさか小説を伝記ということも出来まい。（略）私は従来、写生文というものを書いて来ておる。この書もまた、私の一年間の写生文を集めたものと言ってよい。しかしこれが私においては自伝である。従来書き来った写生文も悉く私の自伝であると言って差支えない」（朝日新聞社版）

「淡々たる記述そのままに、即事実の傾向が強く、したがってそこに見出される創作性は人生体験の取捨選択によって成り立っている。この傾向をとっているということは（略）虚子が文学の方法として写生を重く見、事実を尊重するというゆき方をとったこと、文章体として子規の写生文体を発展させ、完成したことと深い関係をもつもので、その意味で自らを客観視し、客観視した自らの人生を写生したものである」（松井利彦　虚子全集第十三巻解説）

写生は無常観がテーマであり、すべての物が眼前から滅び去るとのこと。講演を拝聴してこの句を思い出した。

秋風や眼中のもの皆俳句　（畑　毅）

山本那実書

岸本先生を囲む会

会場を「奈々伊」に移し、正恵さんのたっぷりなユーモアとスマートな司会で岸本先生を囲む会がスタートした。四十七名の参加者は、岡山に因んだ内容の表示席へくじを引き着席。奈美さんの挨拶、真理子さんの乾杯発声。その後、しなやかな筆文字のおしながきが添う秋の味覚を堪能しながらの歓談。

そして岸本先生とのQ&A。

「先生の選句基準は」に対して理路整然と、「選者人数にもよるが、多い時は他の方がとられる句ではなく、地味で写実的な句をとる。ぱっと読んだ瞬間の直感で決める。じっくり読み込み作者がどう考えているかが分かると情が移る。情が移らないうちに捨てる。選句は捨てること。利酒と同じ。ゆっくり飲むと酔う。ぱっと吐き出す」

岸本尚樹氏懇親会

ここから薫風さんの軽妙な質問開始。
朝日新聞の「折々のうた」で大岡信氏が絶賛された句「虫時雨猫をつかめばあたたかき」の句は何歳ごろの作かと。
「まったく記憶がないが、六十一年刊行の句集にあり、二十歳頃の句かと。句には何かに感動して作った句と、出来上がったもので面白がる句がある。これは後者の句」。
岸本先生の奥様は誰もが存じ上げている有名俳人岩田由美氏。薫風さんが「お二人の馴れ初めは」と聞きながら奥様の著書『奥の細道―旅をして名句』の一文を紹介。
「婚約者（岸本先生）に言われた。俳句を作らないと休日どこへも連れて行かないぞ。一人で勝手に行ってしまうぞと脅されたのは確か」。
岸本先生は言ったことを婉曲に認められ、「嫁は父の教え子で父からの紹介。現在有料老人ホームに入居中の私の母を一日交替で見舞ってくれる良い嫁である」と。参加者納得の頷き。
「NHK俳壇では聞けないお話をありがとうございました」と謝辞。
ここから趣向が変わり、正恵さんの呼びかけで席ごとに一句を作る。条件は岡山弁。
☆夢　でえれーなあ尚毅と由美の十三夜
☆蔵　「虚子を読む」でえれえええが秋日濃し
☆晴　秋ご膳みんなまっとる早よしねー
☆鰆　なみなみときやうてえやうな草の露
☆黍　遠回り月がでえれえ青（あえ）えけん
☆桃　あんごうと大あんごうと炬燵かな
☆雉　うつたての強き楷書や文化祭
☆鶴　大根（でえこん）をてーてーとおばあちやん　（順不同）
最後は全員起立で「桜ほろ散る院庄」で始まる『忠義ざくら』を大合唱。
天莫空勾賤
時非無范蠡

詩の部分は、歌舞伎の大向うでの声がけや、詩吟で鍛えあげられた薫風さんの声が一枚の水のように静まり返った会場に朗々と響き渡った。征之進さんが岸本先生を囲み充実感の満ちた会を締め括り閉会。

（磨家　泉）

記念特集

岡山県俳人協会45周年

当時のことをご存じの方々に思い出を書いていただきました

45年を振り返って

容田真理子

合同句集第7集25周年記念号及び40周年第15集記念号の座談会によって人脈や成り立ちの様子などお分かりいただけるはずですが、さらに45周年を振り返ってと言われれば俳人協会の諸行事に携わった仲間たちのことを想います。
岡山市田町にかつて卸問屋であった野口睦世さん宅は大きな倉庫に何台でも車が置ける恰好の場所で、理解あるご主人に甘えて俳句大会の選の集計、打ち合わせ、などなど……また大倉氏が皆にパソコンを勧めたのもその頃でした。仕事の終わる頃には必ず美味しく入れた緑茶が出されて「あのころはたのしかった」とは難波政子さんの口癖です。
烏城第1号からガリ版刷りの原紙を切っておられた坂田芝子氏、耳が遠い同志で小寺冬至会長とは意気投合でした。倉敷の貝原清子さん三宅竪子氏、平松草山氏、浅原ちちろ氏も天国の人、残された作品を合同句集を繙いて思い出に耽ることにいたします。

草創期の旗手たち

大倉　白帆

設立総会、第1回俳句大会等が行われた昭和50年代の半ばは、オール電化の掛け声も明るく、国中が活気を呈していた。とは言え会報は未だ謄写版刷り。大句会も参加者全員が一丸となっての互選で、全て人力でよくやったものだと思う。句会後はよく酒も飲み、俳論口論と元気よく、その勢いを真面目（しんめんもく）に協会運営に向けてくださったものである。その方々へ敬意を表し、のちの標として作品を掲げることとした。
（物故者のみで、要職にあった方々から抄出した。）

初雁や山脈遠く序を正し　初代会長　小寺　冬至
湯の町の昼は人見ず夏つばめ　二代会長　井上　杉香
春一番山を過ぎゆく山の音　初代支部長　藤原　滋章
真すぐに物の見え来ぬ夏燕　事務局長　角南　星燈

妻とゆくこの世筍流しかな
三代会長　児仁井しどみ
川の面に日は音たてて薄氷
副会長　吉備　猿彦
鰯雲ちりぢりにして湖の波
烏城編集長　坂田　茅子
くさぶえのそらひといろに流しけり
副会長　太田　蘆青
桐の木のうしろ姿や後の月
副会長　難波左斗子
万緑や余呉を鏡に賤ヶ岳
副会長　成田　公郎
貫きてこそこころざし梅真白
四代会長　三村　紘司
ひとまず〈了〉

県俳人協会45周年をふり返って

杉本征之進

初めに岡山県俳人協会の発足を言いだされた人は『春嶺』主宰の岸風三楼氏です。第1回俳句大会の講演は岸風三楼氏と大阪教育大学の鳥越憲三郎氏の二人でしたが、第1回俳句大会にふさわしい素晴らしい講演でした。私事ですがこの大会を「第1回岡山県俳人協会俳句大会に参加して」と題してその時の所属俳誌『獺祭』に発表しています。

ここで県俳人協会の会員の資格について論じられましたが、総合俳誌『俳句』・『俳句研究』・『俳句年鑑』等に登録されている人又は各結社の同人で、県俳人協会の役員二人以上の推薦のある人でした。かなり厳しい資格でしたが何故か社団法人俳人協会員の資格は問われませんでした。私も社団法人俳人協会の会員ではありませんでしたが県俳人協会の会員に推薦されました。合同句集の創刊号に名簿が載っていますが、この名簿には県俳人協会の役員・幹事・会計幹事は記録されていますが社団法人俳人協会の会員の記録はありません。

協会の運営は主だったものが数人で決めていましたが、ある総会で笠原和恵氏が協会の運営事項は総会で検討すべきだと発言され、笠原氏の遺志を継いで大倉祥男氏が軌道に乗せられました。笠原氏は男性的な人で言葉振る舞いも男性的でした。強面の男性会員も笠原氏には一目置いていました。この軌道に乗った会の運営も最近では知らぬ間に決まっている事などがあり危惧しています。

岡山県俳人協会45年を振り返って！

三垣　博

一番の思い出は、合同句集にあります。設立5周年を記念して、昭和62年の初刊があります。この句集は、当時の会長小寺冬至氏の元で編集され、当時の会員150名で出句者は130名です。合同句集を繙くと一人ひとりの名前を懐しく句を読み返すと記憶に残る方々の顔を思い出します。現在も役員として活躍している方は知る限り、杉本征之進氏、難波政子氏、密田真理子氏、曽根薫風氏、樋口千恵子氏、山本那実氏らを含めて十数名が現在も在籍しています。合同句集は脈々と途切れずに第十七集を発刊しており、特に巻末の「協会事業の歩み」を読み返すと感慨深いものがあります。合同句集には歴史の重みを感じます。

俳人協会45周年に寄せて

古谷　静

創立45周年おめでとうございます。早いもので私も創立当初よりの入会です。

県俳人協会（以下、俳協）の設立に当たり角南星燈氏、児仁井しどみ氏等と共に私の俳句の師、吉備猿彦先生も尽力しておられその関わりから入会を勧められたと記憶しています。今は鬼籍に入られたその方々も現在の俳協の隆盛を喜こんでおられることでしょう。

当時を振り返ってみますに、超結社の吟行や句会等盛んでした。句会も盛り上りましたが、二次会の居酒屋や小料理屋での談論も楽しく、懐にやさしい美味なものを味わせて頂きました。その後も俳協は代々の会長、役職の方々、幹事、会員の皆様のご尽力で発展を続け、会の運営も事務局長の役職を設けて以来、更に円滑、充実したものになったと思います。皆様の献身に感謝します。

私自身は平成11年に当時の会長、三村紘司先生の時に常任幹事に推され現在に至っています。在職中は仲々、時間のやり繰りが大変でしたが、退職してからは優先して俳協の活動に参加しています。総会、講演、吟行・俳句大会等、多くを学ばせていただきました。

会員の皆様の各行事への参加により、この県俳人協会が更に発展し末長く盛況でありますようお祈り致します。

設立時の思い出を語る
インタビュー形式で

難波　政子

俳人協会設立にあたり、十四～五人の先生方が集まられた折、雑用係として私は呼び出され

ました。広い畳の部屋でした。俳句のためには激しく論争するほどの情熱が先生方には、あふれていました。どの方も非常に個性的で県俳人協会の重鎮となられた優れた方々です。中心になってお世話係となったのは、角南星燈氏、児仁井しどみ氏、吉備猿彦氏の三羽烏と言われた方々です。俳句について、時には取っ組み合いのけんかまでしたこともあります。こういう時には星燈氏の奥さまと私は、奥でひっそりと息をつめていました。でもそのあとでは必ず皆で成田家に出かけ、酒を酌み交わして落ち着くのでした。今でもお一人お一人のお顔を思い出すことができます。

当時、会員になるためには俳句歴三年以上、さらに結社の異なる方お二人の推薦を受けなければいけないという厳しい規定がありました。私は雑誌等にも投句しながら、協会のお手伝いをし、三村紘司先生、角南星燈先生のご推薦で、三年後に晴れて会員となったのです。またいつか機会があれば、次々と頭に浮かぶ思い出を語りたいと思いますが、今回はこれまでにしましょう。

本年3月合同句集第十七集刊行
一句鑑賞

生きるとは闘ふことか鵙高音

清中　蒼風

「生きるとは」という大きな問いに、多くの賢人たちが思いを巡らし、それぞれの回答を導いてきた。

蒼風氏は「生きるとは闘ふこと」と看破された。今までの人生を振り返って考えられた末の答えである。深い人生観が窺われよう。季語の「鵙高音」には弱肉強食の厳しい自然界の掟が読み取れる。この季語によって、哲学的な内容が俳句となり、詩となった。

掲句をきっかけに、「生きるとは」という問いに、私なりの答えを考えてみたいと思った。

（柴田　奈美）

啓蟄や闇に目を剝く多聞天

田中　立花

この句に出会い、まず思い浮かべたのは四国霊場の南光坊だった。

愛媛にある南光坊の山門には仁王様ではなく四天王が睨みを利かせている。

その多聞天の表情がありありと思い出されたのだ。

啓蟄の頃は四国も春の兆しを感じお遍路さんの姿が増えてくる。

しかし、寺の中は凛とした空気感が漂いなおかつ薄暗い。

片手に宝塔を掲げ、甲冑を身に着ける姿は毘沙門天として独立した信仰の対象にもなり人々を惹きつけている。

姿だけでも勇ましい上に闇の中に目を剝いて何人も見逃さない気迫は、しっかり心して参拝せよと諭されているようにも感じる。

そんな多聞天がまるで血が通っているかのように表現されたこの句に、つい背筋が伸びるのを感じたのは私だけでは無いかもしれません。

（難波　恭子）

花冷や靴箱の名を剥がす夕

吉田　智子

作者は幼稚園（保育園）の勤務を経験された方でしょう。

3月末、4月初めは、旧年度の整理と新年度の準備に大童。新入生を迎えるために、靴箱の古い名札を剥がします。古い名札の子は卒業したのか、進級したのか、もういません。一人ひとりを、懐かしく思い浮かべながら作業しているのでしょう。

「花冷」、「夕」の用語が、表題の「愛しきもの」をしみじみと偲んでいる気分をうまく表出していると思いました。また、現場を経験した人にしか詠めない句だと共感しました。

（南　のぼる）

七草を籠よりひろげ野をひろぐ

磨家　泉

俳句について虚子翁は「俳句は対象に対する「存門」（挨拶）である」と。鑑賞者は五感を以っ

て自身の中で共鳴共感する作品を愛でる文学ではないでしょうか。

揚句は素朴に伸やかに七草を通し早春の自然の恵みに多分家族と共に感謝している情景の様ですが、下五「野をひろぐ」を得たことで更に作品の深み、奥行きが増し、想像力を逞しくさせます。平安時代に始まった七草の節句、私には七草と言えば粥は勿論、何故か平安王朝の雅な女官達が山野に戯れ、又七草囃が響き渡る光景の絵巻を思い描きます。将又、今年の大河ドラマ「光る君へ」の紫式部らの物語や日記、和歌集等当代文学へ誘なわれ楽しく豊かな時を頂ける作品です。

（笠岡　豪）

シベリアを語らぬ考や敗戦忌

杉本美奈子

終戦から今年で79年。この句は私の父と重なることが多く、とても共鳴しました。

お父様のむごい戦争体験や、厳冬のシベリアでの自由のない過酷な抑留生活等を、生涯、口にすることなく逝かれたのでしょう。どんな思いだったのか想像を絶します。思い出したくないという、心の叫びも聞こえます。そんなお父様をご家族の皆様が優しく見守ってこられたご様子もうかがえます。

中七の「語らぬ考や」の切字が、威厳あるお父様の心情を端的に表現され、力強く心に響く句となりました。

お父様のような悲惨な体験をする人が二度とないよう、いつまでも戦争のない平和な日本であり続けてほしいと願う、作者のお気持ちがよく伝わります。

（髙杉　浪子）

リハビリのグーチョキパーに春の風

谷　美津子

ジャンケンは物事の勝負を簡単に決める手段で、小さな子どもから大人まで使っています。グーチョキパーの動作は手や足の指はもちろん脳のリハビリにも有効と聞いています。

作者は体調を崩されてリハビリに取り入れられているのでしょう。私も昨年同じ経験をして効果を実感しました。毎日のジャンケンリハビリと「春の風」という明るい季語で、前向きに頑張っておられる姿が見えるようです。

（金森ゆみ子）

龍の玉こぼれ俳句といふ快楽

脇本　妙

此の度、原稿依頼をいただいたのを機に今一度、作品鑑賞に臨みました。一句一句の秀作に度々頁を繰る手が止まりました。最終句まで読み進み、これこそ俳人の目指す境地であると感銘を受けました。脇本様のこの一句は、合同句集を締めくくるにふさわしく、全体の品格を底上げするものと信じます。

平素からの凛とした空気感、それでいてユーモアのセンスも持ち合わせておられ、目標と仰ぐ女性です。龍の玉の艶やかな碧色にも通じます。私は略歴欄に「第18集にも応募できるよう、これからも励みます」と認めました。この言葉をそのまま脇本様に贈りたいと切に願います。

（眞木　雅子）

令和6年度俳人協会秋季吟行

―岡山縣護国神社―

令和6年11月10日（日）岡山県俳人協会秋の吟行句会が護国神社の「いさお会館」で開催されました。

当日は「岡山マラソン」と重なり一分の差で、バスが止められ電車で来た人、歩きを余儀なくされた人、それでも俳句の上達は吟行に勝るものなしと39名の方が参集されました。

岡山縣護国神社は、岡山市中区奥市にあり祭神はすべて戦死者。戊辰戦争から大東亜戦争に至るまでの戦病死者も含まれ創建150年を数え、英霊5万6千柱が祀られております。操山の稜線の少し凹んだ所に大楠を背に本殿、伸びやかな拝殿の美しい神社です。

11時30分に投句は締め切られ、13時より柴田会長の開会の挨拶、中に「英霊に捧げるような句が多い様に思いました」とのお言葉。39名、107句「三句はきついよね」と言いながらの選句、特別選者5人は5句選内1句特選。吟行

岡山縣護国神社

担当の浮田さんの司会の元、速やかに運ばれ事務局の方々のすばやい対応に感服しきり。
披講の方の声音を聞きつつ、本当に英霊に捧げる句の多く、共鳴されていました。最高点は「英霊は五万六千神の留守」浮田雁人さん。二の鳥居の前に書かれていた事よく観察する事を学びました。特別選者の講評は興味深く、皆心に響くものを頂けたと思いました。
小倉副会長の挨拶と浮田さんの来春の句会での再会を約し14時30分閉会しました。
（正垣セツ子）

母子像を見上げる

慰霊塔吟行風景

会場風景

特別選者特選句

柴田　奈美選
蹄鉄を紋とし冷ゆる軍馬の碑　難波　政子
曽根　薫風選
身に入むやお国のためという御霊　左居　正恵
角南　知子選
英霊は五万六千神の留守　浮田　雁人
三垣　博選
忠魂の碑文字の翳り鵙高音　小倉貴久江
安藤　加代選
小春日や世界平和の文字躍る　角南　知子

互選高得点句

英霊は五万六千神の留守　浮田　雁人
蹄鉄を紋とし冷ゆる軍馬の碑　難波　政子
英霊に捧ぐ一輪冬ざくら　髙杉　浪子
球児の声直球でくる冬の朝　景山　薫
身に入むやお国のためといふ御霊　左居　正恵
忠魂の碑文字の翳り鵙高音　小倉貴久江
英霊は石に刻まれ冬ぬくし　柴田　奈美
小春日や世界平和の文字躍る　角南　知子
冬鵙の猛りの杜や冬紅葉　星島　朋代
君を待つ母子の像や神無月　正垣セツ子
参拝の杖の鈴の音小鳥来る　髙本　徳子
バス電車止めてマラソン冬うらら　景山　薫
狛犬の罅を繕ふ冬日かな　佐藤　史男

護国神社：拝殿・操山

新会員紹介

（「烏城」第86号以降）

工藤　敏行（遥照）
小鳥来る初学の我アンダンテ
村上　凡子（運河）
さしたること無しに日記を書く栗花落
熊代　一紀（馬酔木）
職を辞す熟柿一つの空は青

会員の活躍

◇杉本征之進
・第63回俳人協会全国俳句大会
藤田直子特選
山桜千手一つも遊ばせず
◇磨家　泉
・第63回俳人協会全国俳句大会
染谷秀雄特選
引鶴のしづかに水と別れけり
・『俳壇』六月号
『現代俳句の窓』に「生絹びかり」の題で6句掲載
うららかや兎の形の釘隠し　他5句
◇涼野　海音
・第4回北斗賞受賞
恋の猫塩田王の屋敷より　他6句
「俳句界2024年　4月号」（文學の森）
◇小倉貴久江
・『俳壇』五月号
『名園を歩く』に「城下風光」と題し句とエッセイで岡山の後楽園を紹介
花筏のせて水音の巡る園　他4句
◇工藤　泰子
『やんぬるかな（黄）』
随想　印刷のよこやまより上梓

人を語りて己を語る評論集

この度「やんぬるかな（黄）」が上梓され三部作（赤・青・黄）が完結しました。（黄）はその総まとめ。47編構成で、ほぼ同数の俳人の方への解説・句評が展開されております。各俳人それぞれの人生に寄り添った深い思索は俳句の真剣勝負を見る如くです。

「思いやり」と「滑稽味」に溢れた詩情豊かな句評は読む人の心を打ちます。同時に工藤さんの俳句への向き合い方表現とも成っております。奇怪な語句表現をも明快に読み解かれており、思わず納得。楽しく成ります。

本書は俳句の将来を見据えた熱き想いに溢れる評論・句評集です。是非ご一読下さい。

（山下卓郎）

今後の主な行事予定

令和7年総会
3月9日（日）　岡山県立図書館
春季吟行句会
3月30日（日）予定　場所は未定
秋季吟行句会
10月中旬予定　場所は未定
第46回俳句大会
11月2日（日）　岡山国際交流センター
会報『烏城』年2回発行

写　真　大倉白帆　角南知子
カット　佐藤史男

編集後記

11月に豪渓（総社市）の紅葉を見に行ってきました。駐車場から見返り橋まで紅葉と谷川の瀬音に心が洗われました。（小林克己）

岡山県俳人協会45周年特集号編集に携わり、難波政子さん、野口睦世さんたちと俳句大会当日句をパソコンで作成した日のことを懐かしく思い出しました。（広畑美千代）

岸本先生を囲む会はとても素晴らしい会でした。一緒に写真を撮ったり、本にサインしてもらったり舞い上がりました。岡山弁の俳句も楽しい企画でした。（小野純子）

秋らしさを感じにくくなった。去年観た、東寺の燃えるような紅葉のライトアップが懐かしい。いつか、季語博物館が必要になるかも。（畑毅）

先日真庭市の普門寺へ紅葉と四季桜を見に行きました。紅葉はとても鮮やか、四季桜は楚々とした美しさでした。普門寺は「花の山寺」とも呼ばれ、春は石楠花 初夏は紫陽花 夏は夕菅と四季折々の風景が楽しめます。（原田慶子）

今回は45周年特集記事を企画しました。創設当初の皆様の熱気溢れるご様子に感動しました。（角南知子）